

鈴木道太と地域文化創造

—宮城県大河原町職員時代執筆脚本と「新しい土の文化」—

齋藤 史夫

宮城県の鈴木道太は、戦前日本の綴方教師として、特に北方性教育運動を村山俊太郎、佐々木昂、国分一太郎、寒川道夫らとともに担った主要な人物の一人として知られている。また、戦後、子ども会活動に役割を果たし教育評論家として活動したことに、近年注目が注がれるようになってきた。しかし、道太が、第二次世界大戦中・戦後期の宮城県大河原町の文化民生課職員として地域文化創造に取り組み、その後、宮城県児童福祉司として戦後日本の児童福祉の創生に携わったことについては、あまり注目されていない。早稲田大学増山研究室「鈴木道太研究」チームは鈴木道太の郷里である宮城県白石市図書館に保存されている「鈴木道太文庫」を数次にわたって調査した。同文庫で発見した芝居の脚本は大河原町職員時代に「町が学校であるという考え方で」、「新しい土の文化をつくるのだ」と道太が地域文化創造に取り組んだ実相を示し、その意義を解明する第一次資料である。

キーワード：鈴木道太 生活綴方 地域文化創造 社会教育 新しい土の文化

はじめに

鈴木道太は、1930年代の日本で生活綴方教育を創造した主要な人物の一人として注目されてきた。しかし、鈴木道太の業績は、生活綴方や子どもの教育に止まるものではない。その活動は、児童福祉や子どもの文化、少年司法と多岐にわたるが、地域文化の創造、すなわち文化による地域づくりにあたった人物でもある。

2001（平成13）年、文化芸術振興基本法が制定され、文化権が国民の基本的権利の一つとして明確に謳われることとなった。そして2017（平成29）年に同法は、「文化芸術そのものの振興にとどまらず、観光やまちづくり、国際交流、福祉、教育、産業など幅広い関連分野の施策を法律の範囲に取り込むとともに、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用しよう¹⁾」との趣旨により「文化芸術基本法」とその名称が変更された。文化の固有の価値

とともに、まちづくりや教育にとっても文化は重要な役割を果たしうるのである。

第2次世界大戦末期から戦後にかけての宮城県大河原町職員としての道太の活動は、文化を通して生活困窮者の援護や地域づくりに取り組んだ先駆的实践である。小論では、新発見された資料から、その具体的な活動の姿に迫ることとしたい。

1. 課題の設定

1-1 鈴木道太の略歴

鈴木道太（本名、銀一）は生活綴方教育の歴史を語るうえで欠かせない人物である。『民間教育史研究事典²⁾』では「宮城県に組織された千葉春雄の全日本綴方倶楽部系統のサークルとして出発した国語土曜会（1930年）、国語日曜会（1934年）などを舞台に、生活綴方の定型の一つを創り出した教師。その生活綴方の実践は、生活秩序のたてなおしの仕事（この仕事を「集団主義教育」のちには“生活教育”と彼は呼んだ）と結びつけて行われた点に特色をもつ。生活教育論争にあたって

は、たとえいかにカリキュラムを改造しても、綴り方なくしては『仏作って魂入れず』に終わると主張して、もっとも徹底した綴方教師解消反対論を展開したことで有名。」(中内敏夫)とされている。

1940年に治安維持法違反で検挙投獄され実刑判決を受け獄中生活を送った後は、ベントナイト工場での「土方仕事³⁾」の「人夫頭⁴⁾」を経て、戦中・戦後を宮城県大河原町役場の書記を務める。その後、宮城県職員として戦後における児童福祉の創設的な実践の開拓、『こどもから親への抗議—理想の両親のありかた』(宮城教育図書出版協会、1949年)を皮切りに50冊に及ぶ教育書(家庭教育、地域教育)を著し、全国各地に講演に向かう教育評論家としての活動にあたった。また『子ども会』がロングセラーとなるなど、地域での子ども会活動の全国的な展開にも貢献した。

鈴木道太は「学校や教育分野のみならず、児童福祉・子ども文化・少年司法の領域も含んだ総合的視野にあって、子どもの人権保障と地域づくりへの展望に満ちたスケールの大きな先駆的業績を有しており、日本の子ども・子育て研究にとって稀有の足跡を残した人物⁵⁾」である。

1-2 鈴木道太研究の動向

鈴木道太については、前記『民間教育史研究辞典』での評価のように、生活綴方を「創り出した」教師としての戦前期の業績を、生活綴方教育・生活教育・集団主義教育・北方性教育運動の中での歴史的役割から位置付ける研究が多くなされてきた。早稲田大学増山均研究室「鈴木道太研究」チーム(以下、鈴木道太研究チーム)による鈴木道太研究文献調査によれば、中内敏夫、海老原治善、山田清人、宮坂哲文、大橋精夫、杉山明男、城丸章夫・水内宏などの論考が、この研究の系譜に位置付けられる⁶⁾。

生活綴方運動は、中内によれば「明治末期、明治国家の地方自治制の整備政策とからまりあいながら日本の公教育育制度が一応の完成を見たのち間もなく発生し、一九三〇年代へかけて準備されつつあった初等教育運動⁷⁾」であった。鈴木道太は、その成立と意義、とりわけ「北方性教育運動

にとって、村山俊太郎、佐々木昂、国分一太郎、寒川道夫らと合わせて避けて通ることのできない人物とされてきた。

しかし、鈴木道太の果たしてきた役割は教師生活の時期に止まるものではない。戦中・戦後の役場書記としての活動、戦後日本児童福祉黎明期の児童福祉司活動の開拓、その後の教育評論家や短大教師としての姿、など人物像を全体としてみる必要がある。また、学校内での教育に止まらずに、地域の青年・成人を対象とした社会教育、児童福祉、地域における子どもの自治活動や子どもの文化、地域文化とまちづくりなど、その業績について全面的にとらえることが求められる。

鈴木道太研究チームによる先行研究の調査では、近年、生活綴方教師としての鈴木道太像にとどまらない探求が始められている。例えば勝野充行は、子どもの権利条約に謳われる意見表明権や自治の権利の先駆的取り組みとして道太らをあげている⁸⁾。また、鈴木庸裕は、道太の戦後直後の児童福祉司としての実践を評価し、教育における「福祉機能」の内発的発展を考察している⁹⁾。また、森本扶は今日の子どもの居場所づくりの課題を、道太の子ども会論から考察している¹⁰⁾。

鈴木道太研究チームは、これらの研究の蓄積と近年の動向に注目しつつ、鈴木道太の人物と、果たしてきた業績の全体像に迫ることを課題としている。とりわけ、教師になって以降の地域での青年・成人を対象とした活動、また、町役場書記としての時期の活動などはこれからの研究の課題となっており、その解明が求められている。

1-3 宮城県白石市図書館「鈴木道太文庫」調査

鈴木道太研究チームは、「鈴木道太研究の今日的意義は、生活綴方教育の歴史における業績にとどまらず、教育・福祉・文化・司法の多方面にわたって活躍した鈴木道太の人物と業績をトータルに捉え、教育の分野に偏している鈴木道太の業績の再評価を行うことにある¹¹⁾」との認識から、鈴木道太研究を進めてきた。

その過程で、チームは鈴木道太の郷里である宮城県白石市図書館に、道太の死後遺された著書・資料・原稿類が保存されていることを知り、数次

にわたって調査に赴いている。同図書館の整理では、「鈴木道太文庫」の収蔵数は4167冊に及ぶ。チームの整理では、文庫所蔵の資料群は大きくは①鈴木が残した著書、②鈴木蔵の蔵書・雑誌類、③鈴木に関連資料に分けられるとした。

鈴木に関連資料は、同図書館において多数の紙製ボックスファイルと2つのプラスチックケースに保存され分類番号と題目が記されている。しかし、それらの分類は便宜的なものであるため、チームとして整理・分類の作業に着手した。現段階では仮説的に①手書き原稿、②講演日記、③自筆ノート、④職務日誌・ケース記録、⑤「雑記」、⑥個人写真・履歴書、⑦手紙・書簡、⑧スクラップブック、⑨集会・運動・各種取り組み、⑩子どもの作文、⑪録音テープ、⑫文集・詩集、⑬山形女子短大講義ノートの13分類としている。

これらの未整理資料群は、今まで本格的な整理・検討はなされておらず、鈴木道太の人物と業績を明らかにするうえでの貴重な第1次資料である。

1-4 鈴木道太の活動の時代区分の仮説と研究課題

鈴木道太研究チームは、鈴木道太の歩みを以下のように、仮説的に6期に分類している。

I期	誕生から教師になるまで 1907（明治40）年から1928（昭和3）年
II期	教師となり懸賞論文「学級・集団・技術」1932（昭和7）を執筆するまで
III期	宮城県綴方教育研究会発足から検挙まで
IV期	治安維持法で検挙されてから獄中生活をへて出獄まで
V期	出獄し役場書記を経て児童相談所の児童福祉司になるまで
VI期	児童福祉司となってからの活躍

また、鈴木道太の活躍の分野と解明すべき内容を「1教育（1）学校教育（2）社会教育・地域づくり（3）家庭教育、2文化芸能・地域文化創造、3福祉分野、4司法分野、及び、①鈴木道太の子ども観・人間観、②鈴木道太の『仕事の流儀』－方法論」として整理している。

1-5. 研究の目的

鈴木道太は、教師としての教育や理論的な活動

の中で、常に地域の役割をとらえ、地域での活動、とりわけ文化的な活動と社会教育活動を独自に行ってきた。また、教職を離れた後の町役場書記としての活動においても、地域文化の創造・まちづくり、を行ってきた。鈴木道太においては、地域文化創造・まちづくりは、生涯の活動を貫く視点である。

鈴木道太文庫の未整理資料群の中には、この点についての理解を深める第1次資料として4種の芝居の脚本が含まれていた。

本研究は、鈴木道太研究チームによるトータルな研究の一環である。そのうち、V期の時期の活動の内実を明らかにすることを可能とする第1次資料である、ガリ版刷りによる4種の芝居の脚本の発見を報告しその内容を明らかにすること、また、「新しい土の文化をつくる」という鈴木道太の「文化芸能・地域文化創造」や、「社会教育・地域づくり」に迫る道太の活動の姿と意味を明らかにすることを目的とする。

2. 宮城県白石市図書館鈴木道太文庫所蔵の芝居脚本の概略

2-1 鈴木道太脚本「まつりの夜」記載の「鈴木道太著作集」一覧と文庫所蔵脚本

鈴木道太文庫には、道太作の芝居の脚本が3作4バージョン保存されていた。その内、昭和二十二年十一月の日付の「まつりの夜」の最終ページには「鈴木道太著作集」として、以下のように5つの芝居名が記されていた（以下脚本本文引用は旧字縦書き）。

「鈴木道太著作集

- 一. 英魂と父の還える日（昭和十九年十月）尾形座上演
- 二. 冬来（旧略字）たりなば（昭和二十一年一月）光盛館、キリスト教会上演
- 三. 人民の登音（昭和二十一年十一月）大河原小孝校講堂
- 四. 聖職（昭和二十二年二月）大河原小孝校講堂
- 五. まつりの夜（昭和二十二年十一月）大河原小孝校講堂上演予定

そのうち、白石市図書館鈴木道太文庫において、

鈴木道太研究チームが発見した芝居の脚本はいずれもB4版わら半紙にガリ版刷りされ半分に折って綴じられた「冬来たりなば 一幕」の2つのバージョン、「聖職 一幕」、「まつりの夜」の4種類であった。

「冬来たりなば 一幕」本文12ページ。
 「冬来たりなば 一幕」別バージョン・同ページ。
 「聖職 一幕」本文24ページ。
 「まつりの夜」本文22ページ。

戦中の「英魂と父の還える日」、戦後期最初の「人民の登音」、また、この「著作集」にはあげられていない、荒浜小学校教師時代に行った「農民劇」といわれる「蒼穹（あおぞら）村芝居」の脚本「捨子」と「佐倉宗五郎」は文庫には発見できなかった。

2-2 鈴木道太文庫所収の脚本の概要

(1) 「冬来たりなば 一幕」

①前作「英魂と父の還える日」あらすじ

「冬来たりなば 一幕」と題された脚本は2種類ある。まず、表紙に「英魂と父の還える日 續編」「原作・演出・鈴木道太」「配役 山村啓吉…鈴木銀一」とある脚本を見よう（図1）。1946（昭和21）年に道太が主演として上演した芝居の脚本ではないかと考えられる。

劇中登場人物は以下の通りである。

山村啓吉
 山村三平
 啓吉の妻おはな
 戦災者の娘
 巡査
 浪花節
 笛

本文最初の2ページには「解説」として、本作の前編とされる「英魂と父の還える日」のあらすじが記述されている。

その概要は以下の通りである。家族を捨てた啓吉の父甚平が「十年流離の旅」から帰ってくるが、啓吉は迎え入れることを拒んだ。しかし、その日は愛弟三平の戦死の報せが届いた夜であり、「父を許せと泣いて死んだ。三平戦死の報知は啓吉の

冷たい氷を解いた」。昭和廿年三月、甚平は亡くなり、その夜、家は空襲の猛火に焼かれる。啓吉は妻をもらいバラックを建てる。その後、敗戦をむかえる。

「黄金にも玉にも換へ難い弟は、笑って散って行ったのだ。敗戦の国情惨タン、啓吉は愉しめなかったのだ。啓吉は酒をあふった。そして、酒だけが悶々たる啓吉を慰める心の友であったのだ。」と、いつものように啓吉が酔って帰るところから「冬来たりなば」が始まる。

②「冬来たりなば 一幕」あらすじ

啓吉の妻、花（脚本本文のまま）がやきもきしながら待っているところに、啓吉は「焼いたとて一焦らしたところで、誰賞めませう 表面（うはべ）は笑って、陰で泣け、こりゃこりゃ」と歌いながら帰ってきて中をうかがい、入り口で花の無視・言い訳から、ご飯を準備するしない、諦めて自分で準備するなどのやり取りが続く。歌ったり、中をうかがったり、無視されたり、ご飯をめぐるやり取りは笑いを誘ったであろうと考えられる。

そこへ、「御免下さい」と女性が2人、啓吉の

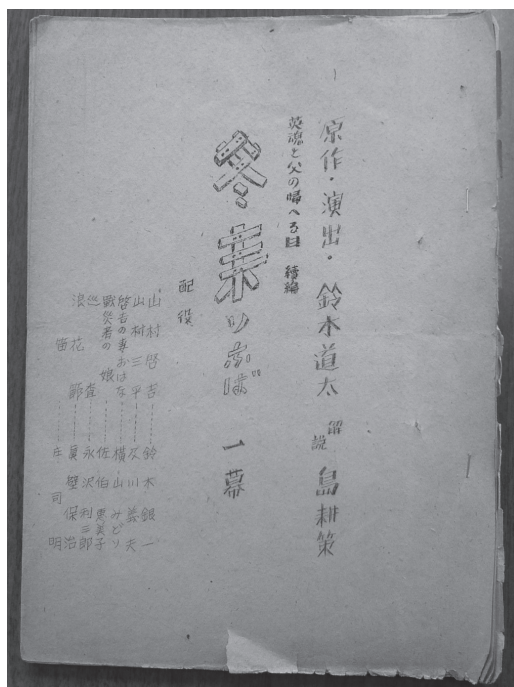


図1 白石市図書館蔵 脚本「冬来たりなば 一幕」表紙

家を訪れる。池袋で父と3人で暮らしていたが、3月の空襲の爆風で父が死に、駐車場のガード下で暮らすことになった母と娘であった。

ここで浪花節が、「通るか、つた一人の男・・・どさり、と投出す米袋」と観客に告げる。食事に事欠く親娘に、若い男が無理矢理米袋を渡し名前も告げずに去ったという。むしろのはじに落ちていた手帳には「山村啓吉方三平」とあった。そして親娘は、三平にお礼をするために、手帳の住所を目当てに捜し歩いていたのだと言う。

「この時ピーと呼笛が鳴り、ガタガタと靴音荒く山村三平が駆込んで来る」、戦死の報が届いた弟は捕虜となって生きていたのだ。兄弟のやり取りの後、巡査が「山村三平 御用だ」と続いて舞台上に登場する。親娘に渡した五升の米は強奪したものであった。

「貴様恥じないか」となじる兄に三平は「恥じませぬ」「あなた方国民は神様の前に恥じませんか」と、横浜に上陸以来目にした、流離者の群れ・闇商売のがりがり亡者・米を出さない農民・敗戦で儲けるまけぶとりなどの状況を口にする。

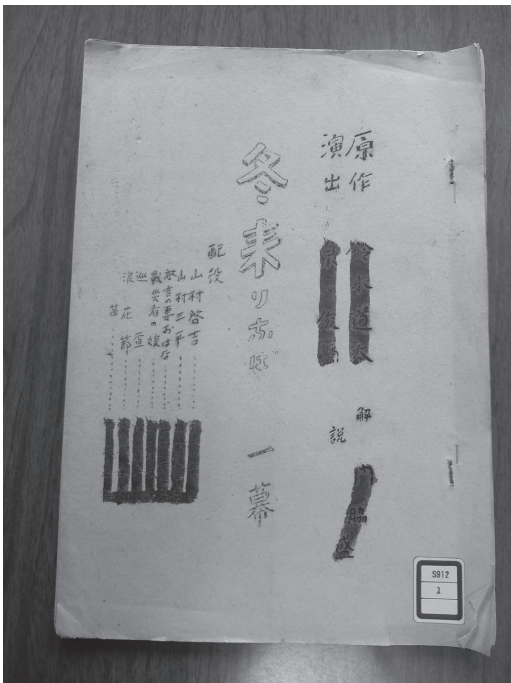


図2 白石市図書館蔵 「冬来たりなば」別バージョン表紙

巡査の慈悲から、兄弟は家で一晚語り明かし、翌日、三平は連行されていく。

浪花節が「敗戦日本の冬去りて 春が来るぞとみんな待て」と告げる中、幕が下りる。

(2) もう一つの「冬来たりなば 一幕」

「冬来たりなば 一幕」にはもう一つのバージョンがあった(図2)。表紙には、「原作」「演出」「解説」「配役」のそれぞれに人名が付されているが、その部分が墨塗りされている。しかし、その名前は透かして判読可能であり、「原作」は鈴木道太とされているが主役の啓吉の配役は道太ではない。

本文1、2ページの解説は、全体はほぼ同じ文章であるが、最後の「嘗つて全町を嗚咽と慟哭の裡に落した名編『英魂と父の帰へる日』続編」との部分が、「鈴木道太先生苦心の快作 瀬嶺青年団熱演の」と変えられ、「『冬来たりなば』的一幕」と続く。

ガリ版刷りのため、製作者の筆跡が残り、右肩上がりの字など共通の特徴が見られ、両脚本は同一人物(道太か)によるものではないとも考えられる。宮城県北部には瀬峰町があり(2005年、町村合併により栗原市となる)、同町の青年団によって上演された可能性がある。今後、両脚本のガリ版制作者、道太の宮城県内での青年団活動や地域文化活動への影響力の解明などが望まれる。

(3) 「聖職 一幕」

① 「聖職 一幕」の表紙・裏表紙の記述

1947(昭和22)年2月に上演されたとされるのが「聖職 一幕」である(図3)。本作の表紙には以下のように記されている。

「教員組合大衆宣傳用脚本 昭和廿一年十二月一日作る

教育の民主化のために斗ふ全国四二万の教師に捧ぐ

聖職と崇められつ、夜の街に そのおる者はおでんを賣りぬ

“全国教員組合斗争委員長岩間正男”

聖職 一幕

宮城県柴田郡大河原町役場 鈴木道太作」

また、裏表紙には、「舞台面」の図とともに、
 「聖職 一幕
 作者 鈴木道太
 宮城県柴田郡大河原町教員組合大衆啓蒙用脚本
 非賣品」

と書かれている。

②「聖職 一幕」あらすじ

本作は「東北地方のある町の山の分教場」が舞台である。最終ページには、役が以下のように一覧されているが、具体的な配役は無い。

山村啓吉 (五十四五才)	田舎の分教場主任
娘 秋子 (二十三四才)	啓吉のひとり娘
女教員 新山治子 (二十三四才)	啓吉にあこがれる元教え子
三平 4年生児童	
佐々木訓導 (二十四五才)	本校の訓導 教員組合員
加藤訓導 同上	
町の巡査 (三十才位)	誠実な警官

啓吉は「今度の憲法についてなんか綴り方の募集が縣から来た」ものを、4年生の三平に書かせている。啓吉の元教え子で、今はともに分教場の教員である新山がいる教員室に、啓吉の娘、秋子

が教員住宅からの通路からやってくる。

秋子は啓吉に「お父さんお金ない?」「里枝ちゃんに注射して貰ってくるの」「二百円はかゝるでせう」と言う。家の金目の物はすべて売ってしまっている啓吉は「お父さんの月給の半分でねえが」などと言い、「痩せても枯れても人の子の教師だぞ」とボーナスの要求などはできないと答える。陰で聞いていた新山が、注射の費用を貸すこととなり、秋子は病院へと向かう。

そこへだんだんと高く響く詩吟の声(加藤)とともに、本校の教員、加藤・佐々木が啓吉に教員組合に入ってもらおうよう説得に来る。啓吉は「自分の職業は聖職である 天の與へたる聖職である…それを俸給をあげるとか 待遇を改善しろとか、それはまるで労働者の言葉ではないか 諸君のその空騒ぎの陰で聖職は悲しく泣いていますぞ」と断る。

二人は帰るが、「こんなみじめな…(ママ)生活で…(ママ)よい教育が生れるとは考えられません」と、新山が組合に参加することを啓吉に告げている内に巡査が現れる。秋子が林檎屋で客の財布を盗んで、いましめた上で釈放したが、様子を取り乱しているのが谷底に身を投げてもしないかと心配してきたのだという。

「顔面蒼白、かみ乱れ うつろな瞳裏心して立っている」秋子に啓吉は、「秋子 お父さんが三十年 眞直ぐに暮して来た教育の道を出来心とはい、ながら…何故汚してくれたんだ」「假令一家残らず餓死しても 何故教育者の娘として体面を汚すような事をしでかしたのだ」となじる。秋子は医者に行く前に里枝に林檎を買ってやろうとしてお金を落としたことに気付き、「ふらふらっと盗ってしまった」のだという。

秋子が「里枝ちゃんに林檎を買ってやろうとしたら お金がないんです あのお金がなかったら お医者さんに上げることは出来ません」「お父さん(激しく泣く)秋子は教育者の娘になりたくない…可愛い子供の病気のさい医者にもかけられない先生の娘になるよりは 大工さんの娘になって みんな豊かに暮らす方が俸せだった」と言うのに口論しているうち、「山村漸次目が据って来る。発狂する 崩壊する聖職意識に心の張りを失

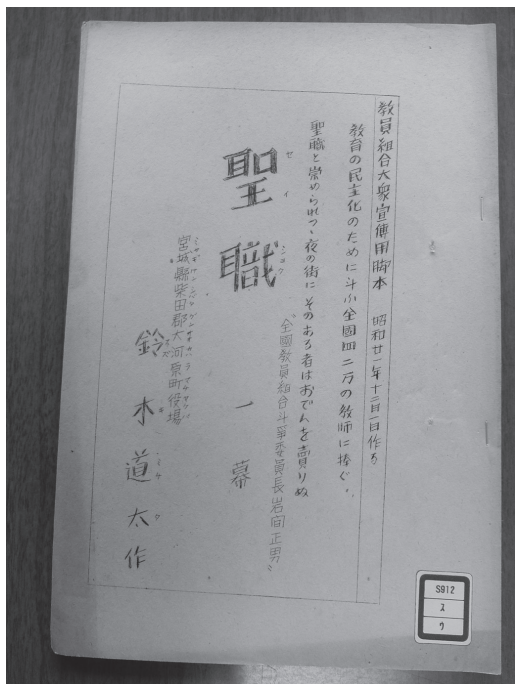


図3 白石市図書館蔵 脚本「聖職 一幕」表紙

う」。秋子が「お父さん」と声をかけるが、啓吉の「ウハハハハ」という「哄笑ひびくまゝに」幕となる。

(4) 「まつりの夜 一幕」

① 「まつりの夜 一幕」の舞台と配役

1947 (昭和 22) 年 11 月に上演されたとされるのが「まつりの夜 一幕」である (図 4)。

表紙には、以下のように記されている。

「1947.11 月 藝術祭公演用台本

まつりの夜

一幕

鈴木道太作

宮城県柴田郡大河原町役場文化民生課」

同じ 1947 年の 2 月の執筆とされる「聖職」にはなかった「文化民生課」と記されていることが興味深い。

本文 1 ページ目には「中秋九月半ばの山の村である」「今日秋祭りの日であった」と示され、「登場人物」が以下のように記されている (人物像の詳細は略)。

山村啓吉 (四十四五才) 村一番の大工
三平 啓吉の弟 (二十七、八才)
秋子 三平のものと妻、いまわ再婚 (二十四五才)
二郎 秋子の新しい夫 (登場しない)
前田の婆さん
婦人会長
村の闇屋
八五郎 職人 二十四五才
権次 同じく弟子 十二三才
住職

19 ページから 22 ページには「まつりの夜 あらすじ」「演出について」「鈴木道太著作集」も記述されている。

「演出について」には、「作の中心は二つになっています 一秋子の再婚の問題をどうするか 二ドブ洛克密造の防止」であること、「大河原町の方言」で書かれているが「涙の出る場面でも方言では笑ってしまいそうで不安」で悲哀感が出なければ標準語にする、よい味が出れば「栗原では栗原の方言岩手では岩手の方言とした方がよいとおもっています」等と記述されている。

② 「まつりの夜 一幕」あらすじ

闇屋が訪問商売している最中に、戦死したとされている三平の命日として住職が啓吉の家に来る。権次が宿で風呂に入った裸の男たちの体に番付をつけたことを叱るなど、観客の笑いを誘ったであろうシーンがしばらく続く。

秋子がどぶろくをもらいに出される間に、三平が活着しているかもしれないというわさが伝えられる。秋子が帰ると、そこに三平が「お兄さん 只今帰って来ました 秋子」と立つ。

秋子大きく目を見張り激しく泣く。秋子が再婚したという事情を聞いた三平は「うそだ うそだ そだごとうそだ」「もとさけえせ」と「身もだえして泣く」。三平と啓吉は口げんかになり、啓吉はなぐりかかる。

「貴様は俺の女房だ」と連れ出そうとする三平に、秋子は「殺してくない さあ 殺してくない俺あんだとも一緒になんねす 今の人とも別れす」「何の権利もみとめらんねで 男の言いなり放題に 犬子のように自由にしきって来た 女子のいのちがもぞこいの (泣く) 女子のいのちがもぞこいの」「女子に生きてることつくづくやんだくなったの」と、泣きながら訴える。

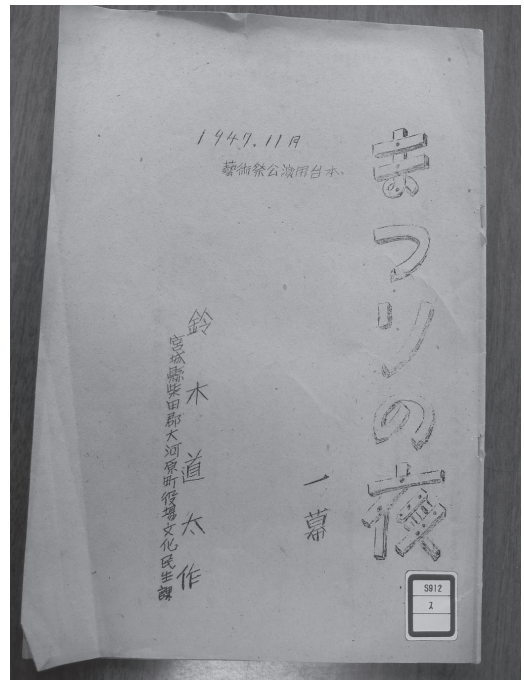


図 4 白石市図書館蔵 脚本「まつりの夜 一幕」表紙

落ち着いた三平は、復員した舞鶴で入れ墨した子どもが煙草をのんでいる姿を目撃するなど、誰も彼もがあさましく生きている姿に「俺やんだくなるようなことばかり見て来たんですが」のに、「そしたら、お兄さんまでどぶろくば飲んで」と、やみの酒に手を出す兄を見て絶望的となった心情を吐露する。

三平の「秋子、お前いま倅せだと思ってっか」の問いに秋子はうなずく。啓吉は三平の肩を抱いて外に出る。外から「見ろ きれいな花火だなあ」の音が聞こえ、秋子が「わあっ」と大きな声で泣き出し「静かに暮」が下りる。

(5) 鈴木道太文庫所蔵の芝居脚本の特徴

以上のように、鈴木道太文庫に所蔵された芝居の脚本には同一脚本の別バージョンを含めた4編があった。筆跡が残るので、今後の確定が必要だが、道太自身がガリを切ったのではないかと予想され、当時の息遣いを感じることができ興味深い。また、具体的な配役が記述された脚本もあり、実際に演じられたことがわかる。

内容の特徴をいくつか見ると、第1に敗戦後の社会問題を扱っていることがあげられる。戦死したと思われていた弟の復員・戦後の生活の困難と闇商売、憲法の制定と民主主義、労働組合の結成と組織化、女性の権利とどぶろく密造などが主題となっている。戦中期と、戦後もう一点の脚本では、実際にどのような主題が扱われていたのか興味深く、発掘が待たれる。

第2には、劇前半の笑いを誘う部分や、浪花節・詩吟などによる狂言回しなど、観客を芝居に引き込ませる要素がちりばめられていることである。酔っぱらう啓吉と妻・お花との家に入る入らない・食事を用意するしないなどのやり取りや、裸の男の姿を番付けする子ども（弟子権次）の姿などは爆笑を誘ったのではないかと思われる。観客を引き込むとともに、笑いから深刻な場面への転換で演劇的緊張も高まったことであろう。

第3に、震災で焼け出される、注射代に事欠く、また一方では闇のどぶろくを楽しむなど、当時の庶民のリアルな生活の一断面を描いていることも特徴の一つである。身近な生活の実感から、当時

の社会問題へと迫る視点を見ることもできる。

笑いや浪花節・詩吟などで観客を舞台に引き込みながら、身近な生活の姿から社会的な課題を考えさせようという道太の作劇・上演の姿勢が見える。

3. 鈴木道太の生涯と文化芸能・地域文化創造—本人の著作から

3-1 「雀百まで踊り忘れず」—幻燈会の記憶

鈴木道太の自伝的な著作からは、道太がどのような気持ちで芝居の脚本づくり、地域での芝居公演に取り組んだのかが読み取れる。

まず、成人以降の地域文化活動の前史ともいえる、小学校6年生の初秋に行った幻燈会を見ておく必要がある。道太は、大河原町職員時代の活動を、「雀百まで踊り忘れず、わたくしはけっきょくがやがやという人ごみが好きな人間なんだな。子どもの時に、裏の川でやった幻燈会を大きくしただけのことではないか。¹²⁾」と振り返っている。

祖父が残した火薬（猟銃に使用していたもの）で花火をつくり打ち上げ、また、そのころ作っていた幻燈器を川で上映した幻燈会である。「入場券をつくるという思いつきで『わあっ』となった。そのうえに、学校にはいない小さい子どもまで招待状を出すということで、われわれは有頂天になった。」「物置の前にむしろをしいた観覧席は超満員であった。」「おれたちの催しはおとなまで集めたのである。」という¹³⁾。

本人の子ども時代を振り返り「いたずら時代」の人間形成にとっての重要性を考察し、子ども会の意味を問うた著が『いたずら時代の人間形成』である。いたずら時代を超えて大人の世界に一歩足を踏み入れるとき、地域の中での文化創造の主体として、子どもから大人まで巻き込んだ活動を行えたことの意味は大きいであろう。

3-2 「新しい土の文化をつくるのだ」—荒浜小学校教師時代と芝居

「新しい土の文化をつくるのだ¹⁴⁾」と、地域を視野に入れた教育活動の一環として、本格的に地域文化活動に自覚的に取り組み始めるのが荒浜小学校の教師時代である。

「蒼穹会」は「官制の青年団の中にわたし（道太）が作ったサークル」である。蒼穹会は寝部屋泊りを廃止し、酒・煙草を吞まず、読書会を月3回開いていた¹⁵⁾。そのサークルの「セクト的な文化を大衆化する道」を求めて開催を始めた「農民劇」が「蒼穹（あおぞら）村芝居」である。そこで上演のために書いた芝居が、現代物の「捨子」と時代物の「佐倉宗五郎」であった。

最初の上演後、道太は「かつて反動的な封建社会は民衆から文化をとり上げました。今日は、民衆自身が、自らの力で、われわれの文化を建設すべき秋であります」とあいさつで述べたのだという。

蒼穹村芝居はその後在任中、年4回上演されることとなる¹⁶⁾。この後、蒼穹会は「事実上村のすべての青年会」となり、「中堅層の人達」で研究会を作り、「法学全集」の中からテキストを選び学習会を続けることになった。

3-3. 「町が学校であるという考え方で」一大河原町役場職員時代

今回採集した4種の脚本は「町が学校であるという考え方で¹⁷⁾」仕事に取り組んだ宮城県大河原町職員時代のものである。治安維持法違反で実刑を受け刑期をすごした後、教員には戻らず「土方仕事」をしていた工場が閉鎖されて、「再出発」するのが大河原町役場の職員としての仕事である。

そこで、「わたくしが一躍町の人気者になるできごとがおこった。芝居をやったのである」という。出征家族の遺家族慰安の演芸会に「なにか出せ」と命令された女子職員たちが困って道太に頼み、「そこでわたくしは、うた、おどり、剣舞、寸劇と、女子職員のやれるものを組み合わせて一幕物のヴァリエティーをつくり、わたくしも監督という役割でそれに出演したのだった。それが物凄くうけて、「その翌日、用があって町を自転車で行くと、どこにいても『鈴木さん、鈴木さん』と大人気」となったのだという。

町民の要望が高まって、もうひとつ遺家族慰安の演芸会をしたさいに、本格的な芝居として書いたのが「英魂と父のかえる日」である。

敗戦によって、引揚者・復員者がくる、生活困窮者も出てくる中で民生課の初代課長となり、自分で「文化」をつけて「文化民生課」と名付けたという。そして、引揚者の支援とともに、公民館の仕事、夜の宿直室での「金曜会」という学習会などに取り組む¹⁸⁾。

役場時代に、それらの芝居に取り組む気持ちを記したのが、国分一太郎が編集していた『生活学校』に発表した「町が学校であるという考え方で」である。そこには、このように綴られている。

復員や引揚者の援護が日程に登った時、僕は「冬来りなば」という劇を書き、援護思想を啓蒙してから、停車場に駅頭援護の施設をつくった。新憲法の式典の後に「人民の登音」を書き、約六千円の入場料をとった。今度は教員組合闘争の大衆宣伝用として「聖職」を公演し八千円の金と各三俵の米と大豆を貰い、それらの全部に行商の利益と、県の補助と合せて四万三千円を困窮者の越冬資金に贈った。僕の劇は、いつでも「山村啓吉」という主役が出るのであるが、山村啓吉さえ出ると町の人はおしかけて来る程の人気を持った。土曜、日曜の昼夜四回の公演であるが、毎回少なくとも八百人以上の観客が動員された。

この芸術祭が刺激になって、東北産業、停車場等にも劇団が生れ、軽音楽団や、幼稚園などの舞踊研究も生れた。やくざ踊りを一掃しよう。われわれの演劇文化を、無血革命の歴史の線に組織しよう。そして一回毎に、雪だるまのように文化は太っている。

この劇団員を中心として、金曜会という読書会が生れた。毎週金日に役場の宿直室に集る。男女二十人程だがみな真面目だ。

そこにはまた、「このごろの教員組合などの会合へ出て見ると、やっぱりひどい。規約や条項の協議などは随分細かく活発だが、具体的なものになると、貧困になる。」「そこで僕は局外者だが演劇運動を通してやったらどうかと提議して」、「とにかくこの経済戦争と平行して文化闘争は是非必要である。教員組合の指導者も、この闘争を通し

て教員を錬え上げ、闘争の勝利の日は、もう昨日の教員ではなかったというようになったらどんなに嬉しいだろう。」「教育の狭い範囲から出て、広い文化的な視界から清新な風を送ろう」とも記されている。

4. 社会教育・地域づくりと鈴木道太の歴史的位置

4-1 地域文化の創造と社会教育

社会教育研究において、北田耕也や草野滋之らは、地域文化創造の歴史の解明と、地域文化創造が地域づくりに果たす今日的役割を探求してきた。

北田耕也は「大衆の概念には、プラスのシムボル（大衆）と、マイナスのシムボル（愚民）の両極にまたがる多様な規定がある」ことから、プラスのシムボルである「大衆」を「民衆」と呼び、「民衆文化」の創造の課題を考えている。北田は「民衆文化」を「民衆の労働と生活のなかから生み出された行動様式と価値表現の総体」とする。そして、「民衆文化の創造は、担い手の創造、すなわち大衆が民衆になるという自己変革の問題と分けることができない」のだという¹⁹⁾。

北田耕也・朝田泰は、社会教育実践者と研究者らの共同研究（研究・実践団体社会教育推進全国協議会の活動を基礎として）から『社会教育における地域文化の創造²⁰⁾』をまとめている。同書において北田は、すぐれた表現は「感動や共感や敬意をなかだちとして、人と人とを結び付ける」としている。そして「美的連帯は、人間性の奥深さ、人と人らしさへの共感と加担と言う積極的なエネルギーを内包」し、「人が人らしく生きることをさまたげるあらゆる障害をとり除き、人の人らしさの実現をめざす社会的な力としてはたらくだろう²¹⁾」とする。

同書では具体的な地域文化活動の実践として、版画・映像・ルポルタージュと自分史学習・読書活動・演劇・民衆音楽論があげられている。しかし、演劇では「演劇と体づくり」として主に竹内敏晴の演劇論と野口三千三の体操の理論の分析にあてられ、その「おわりに」で「構成劇」や、岐阜の「劇団はぐるま」や「わらび座」に一部言及しているのみである。

草野滋之は戦後日本の民衆の文化活動・表現活動の歴史の整理を試みている²²⁾。草野は第二次世界大戦が終結して以降の戦後史を①戦後初期～一九五〇年代、②一九六〇～七〇年代、③一九八〇～九〇年代の3つの時期に区分して「それぞれの時代における民衆と文化をめぐる問題状況を把握しつつ、民衆の表現・文化活動が、どのような価値を生み出し、社会的なインパクトをもたらしたのか」考察した。

今回発見した道太の脚本が書かれたのは、「戦後初期～一九五〇年代」に位置する時代である。草野はこの時期の特徴を、第1に戦時下の大政翼賛会文化部の指導による地方文化活動や産業報国会の指導による厚生文化運動と連続性をもった文化活動が展開されたこと、第2に自らの戦争責任を反省・自覚しつつ民主化がすすむ社会の中で新しい文化を創造していく意欲と理想があふれていたこと、第3に1948年ころより日本の民族的な独立、民族文化の確立を求めていく方向性が文化運動の新たな課題として提起されてきたことをあげている。

今回の調査で発見された脚本は、草野による地域文化創造の戦後史区分の第1期「戦後初期～一九五〇年代」、特に特徴その1の戦前期からの連続性をもって、その2の新しい文化の創造への意欲と理想にあふれていた時代に位置づくものである。当時の民衆文化・地域文化の創造、表現・文化活動の実相を探る貴重な第1次資料である。

4-2 地域文化創造と鈴木道太脚本

草野による時代区分第1期、すなわち道太が職員として勤務した時期の大河原町では、昭和12年から20年の間の召集は231回延662人にのぼり、昭和8から20年の現役兵657名と合わせて帝国軍隊への入隊者数合計1319名が復員する時期である。戦没者数も明治28～昭和6年の合計12名と比して、昭和11から22年の間には時期不詳も合わせて300名という、第2次世界大戦の惨禍による混乱の時期である²³⁾。そのような悲惨な戦争を経た時期の町職員として、復員者・遺家族などの支援は重要な課題であったであろう。そのような時期に行われた鈴木道太による脚本執筆

と芝居の上演は、地域文化創造・社会教育にとってどのような意味を持つのであろうか。

第1に「町が学校であるという考え方で」、「新しい土の文化をつくる」ことをめざす活動であった。教員時代から子どもの生活の改善・向上に取り組む、役場職員としても民生課の仕事に従事したが、生活の課題に取り組むときには常に文化の問題を重視していた。「経済戦争」のみではなく「文化闘争は是非必要である」と考えていたのである。

文化、とりわけ地域文化の創造という点は今でも独自に重視する必要がある視点である。

第2に、道太の教育構想の中には初期から地域・文化が位置付けられており、しかも常に実践的に取り組まれていた。1932年、25歳という若さで『教育論叢』の懸賞論文に入選した「学級・集団・技術²⁴⁾」においては、「常に学級を社会と結び付けて教育する」として、学級集団を学級外の村落・都市集団の一分団・有朋的集団ととらえている。そのために、常に村落集団の組織化に取り組んでいる。

第3に、子どもの教育からは相対的に独自のものとして、青年期教育・成人教育としての社会教育、特に戦後期社会教育の創造にとって道太の実践の位置づけを探求する必要がある。従来、成人教育 (adult education) としてとらえられてきた社会教育は、1970年代以降子どもの社会教育も含み込んだものとして深められている。しかし、道太の実践は子どもの教育の視点からのみではなく、青年期・成人期の社会教育としての営みとしても分析される必要がある。演劇公演を経ての学習会の組織や地域課題への取り組みの実態などは、戦後初期社会教育の実践の一つとして光を当てる必要がある。

その際には社会「教育」としてのみではなく、「文化」の独自の位置づけを探ることも求められる。

第4に、道太の演劇はその後の「経済戦争」の改善にもつながる営みであったことである。芝居公演後に「駅頭援護の施設」をつくり、「困窮者の越冬資金」を用意したのである。また、「役場行商隊」を組織する、ミシンを用意して「裁縫の組合」を作るなど仕事の創造にも取り組んでいる。それらの実際の経済的な取り組みと文化活動との

関連も探求する必要がある。

第5に、鈴木道太の個性や大衆的な性格が、独自の文化的実践を創造することにつながっていると考えられる。「わたくしはけっきょくがやがやという人ごみが好きな人間なんだな。」というように、状況が困難でも、楽天的な道太の性格から、道太自身が大好きで楽しいと思う活動を、意欲をもって前向きに実践してきたのではないかと考えられる。

おわりに

戦後日本の出発期における、地域文化創造者としての道太の活動の姿と意義を見てきたが、今日の子どもの生活と成長の面からも地域文化創造の意義をとらえなおす必要がある。

日本も批准した国連子どもの権利条約第31条には、「締約国は、休息及び余暇についての児童の権利並びに児童がその年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動を行い並びに文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利を認める」(日本政府訳)と、子どもの文化の権利が定められている。子どもにおいても、日本の国内法に文化の権利を明確にすることが課題となっている。

地域コミュニティの縮小、子どもの地域生活の消失が言われている。しかし、東日本大震災後の復興の中では、地域コミュニティの大切さ、そして、子どもも含めた文化を通じた地域づくりの果たす役割が注目されている²⁵⁾。

佐藤一子は、「地域文化を発展させることによって地域の共同生活も支えられ、人が育つという側面もあり、暮らしと文化は一体性をもつといえる²⁶⁾」という。大田堯は「今まで考えている教育認識のキーワード」のひとつに「社会的文化的胎盤—『ひとなる』ことの舞台」を挙げている²⁷⁾。「子どもは、生まれてからいわば社会文化的胎盤ともいべき家庭や地域環境の中で育つ²⁸⁾」のである。地域づくりと「人が育つ」ことに、文化は役割を果たすと考えられるのである。

子どもたちの「毎日・週間・年間単位での、子どもの自由時間が急速に縮小している²⁹⁾」といわれ、子どもたちの地域生活はますます縮小している。子どもの日々の生活の充実、そして、人とし

て「育つ」という面からも、豊かな地域文化を創造していくことが求められている。その際には、道太の「幻燈会」や東日本大震災後の復興に見る、地域文化創造者、地域づくりの主体としての子どもという視点も必要であろう。

今後さらに鈴木道太の人と業績の全体像に迫るとともに、未だ発見されていない戦中期の芝居の脚本の探索、当時、芝居に参加・観劇などした体験者の調査などから、道太の地域文化創造活動の全体像に迫ることを今後の研究の課題としたい。

注

- 1) 文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2017/20170621.htm 2018年3月21日閲覧。
- 2) 「民間教育史研究会」大田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』評論社、1975年
- 3) 鈴木道太『いたずら時代の人間形成』新評論、1969年、p.235。
- 4) 鈴木道太「町が学校であるという考え方で」『鈴木道太著作選1 北方教師の記録他』p.219。
- 5) 増山均「鈴木道太研究序説－『鈴木道太文庫』の価値と鈴木道太研究の今日的意義」早稲田大学文学学術院教育学会『早稲田教育学研究』第8号、2016年、p.6。
- 6) 詳細については、同前増山「鈴木道太研究序説－『鈴木道太文庫』の価値と鈴木道太研究の今日的意義」pp.27－29参照。それらの著書は以下の通りである。中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書、1977年。海老原治善『現代日本教育実践史』明治図書、1975年。山田清人『教育科学運動史』国土社、1968年。宮坂哲文『生活指導の理論』誠信書房、1962年。大橋精夫「我が国における集団主義教育思想の展開」小川太郎編『講座集団主義教育の基礎理論1』明治図書、1969年。杉山明男『集団主義教育の理論』明治図書、1977年。城丸章夫・水内宏「生活綴方教育の遺産」『講座日本の教育2 民主教育の運動と遺産』新日本出版社、1975年。
- 7) 前掲、中内『生活綴方成立史研究』p.14。
- 8) 勝野充行『生活綴方教育』の歴史的意義（その1）－『子どもの権利』保障とのかかわりで『大垣女子短期大学研究紀要』No33、1991年。勝野「子どもの権利と生活教育（IV）－子どもの自治活動の歴史から」『大垣女子短期大学研究紀要』No36、1995年。
- 9) 鈴木庸裕「生活指導と福祉教育における実践的課題－『福祉機能』の内発的發展をめくめぐって」『福島大学教育学部論集』第61号、1996年。
- 10) 森本扶「子どもの居場所づくりと鈴木道太の子ども会論」東京大学教育学部紀要『生涯学習・社会教育研究』第28号、2003年。
- 11) 前掲、増山「鈴木道太研究序説－『鈴木道太文庫』の価値と鈴木道太研究の今日的意義」pp.6-7。
- 12) 前掲、鈴木『いたずら時代の人間形成』p.243。
- 13) 鈴木「夏の名残り」前掲『いたずら時代の人間形成』pp.105-113。
- 14) 前掲、鈴木『鈴木道太著作選1』p.59。
- 15) 鈴木「蒼穹会」前掲『鈴木道太著作選1』pp.49-57。
- 16) 鈴木「農民劇」前掲『鈴木道太著作選1』pp.57-63。
- 17) 鈴木「町が学校であるという考え方で」前掲『鈴木道太著作選1』pp.219－225。
- 18) ここまで鈴木「地方公務員の生活」前掲『いたずら時代の人間形成』pp.234-243。
- 19) 北田耕也『大衆文化を超えて 民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986年 pp.8-16。
- 20) 北田耕也・朝田泰編『社会教育における地域文化の創造』国土社、1990年。
- 21) 北田「人の人らしさへの加担」同前『社会教育における地域文化の創造』p.14。
- 22) 草野滋之「戦後日本における民衆の文化活動・表現活動の展開とその意義」畑潤・草野滋之『表現・文化活動の社会教育学』学文社、2007年、pp.202-222。
- 23) 大河原町史編纂委員会編『大河原町史通史編』大河原町、昭和57年 pp.842－855。
- 24) 鈴木道太「学級・集団・技術－集団主義教育の理論と実際」『教育論叢』1932年。
- 25) 増山均・森本扶・齋藤史夫編著『蠢動する子ども・若者 3・11被災地からのメッセージ』本の泉社、2015年、日本子どもを守る会編『子ども白書』本の泉社の2011年以降の「東日本大震災後を生きる子どもたち」など参照。
- 26) 佐藤一子『地域文化が若者を育てる 民俗・芸能・食文化のまちづくり』農文協、2016年、p.2。

- 27) 大田堯『大田堯自選集成4 ひとなる一教育を通しての人間研究』藤原書店、2014年、p.18。
- 28) 大田堯『ひとなる一ちがう かかわる かわる』藤原書店、2016年、p.75。
- 29) 子どもの権利条約市民NGO 報告書をつくる会国連
- 子どもの権利委員会への統一報告書『日本における子ども期の貧困化 新自由主義と国家主義のもとで(日本語版)』2018年、p.208。
-
- (受付 2018.3.23 受理 2018.7.6)